



# 令和2年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」


## 事業実施報告書

- |     |                                    |
|-----|------------------------------------|
| I   | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び   |
| II  | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成           |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築        |
| IV  | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V   | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成      |

道府県・政令市名【 山口県 】

学校名【 県立西京高等学校 】

1 実践テーマ	I・II・ <b>III</b> ・IV・V（複数選択可）
2 実施対象者 (学年・人数)	対象学年・第2学年 体育コース（男子：22名 女子：16名）
3 展開の形式	○学校における活動 ・教科名（ 保健体育 ）
4 目標 (ねらい)	(1) 元パラバドミントン日本代表選手によるデモンストレーションや講演から、自らの生き方について考えるとともに、運動や体力向上についての意欲を高める。 (2) スポーツドクターによるドーピング検査の詳しい解説、説明を受け、ドーピングの危険性について深く知る。
5 取組内容	<p>○車いすの基本操作について 講師：大浜 真（元パラバドミントン日本代表） 「何故、自分が車いすに乗るようになったのか」など自己紹介後、パラバドミントンが東京パラリンピックから正式採用なることを紹介され、ルールの説明を受けた。障害の Kategorii の違いによってコート幅が変わることなど、オリンピック競技との違いを紹介され、生徒達は非常に興味深く聞いていた。</p>  <p>説明後、大浜さんとコーチによるデモンストレーションが行われ、生徒達も競技用車いすに試乗した。直進することが難しい反面、ターン等はスムーズに行うことができ、最初は操作に戸惑いを見せていた生徒達も徐々に操作に慣れ、楽しそうであった。</p> <p>休憩後、ラケットを持ち車いすの操作を行った。コート内で球出しからラリーを行うなど、実戦に必要な車いす操作も体験した。ラケットを持っただけで、車いすの操作が思うようにできなくなり、またシャトルを思うように打ち返すことができず、改めてパラバドミントンの難しさを知った。大浜さんと生徒（男女1名）、教員とのデモンストレーションゲームも行われ、パラスポーツの楽しさや難しさを体感することができた。</p>  <p>実技を終え、講師から「障害者スポーツを最</p>

	<p>初は簡単にできると思っていたが、やってみると難しく、やりがいを感じた。障害を持つと、当たり前のことが当たり前にできなくなった。ちょっとしたことが不憫に感じるようになる。私たちの障害者を支援できる体制を身近に感じるができない。私はスポーツを通してバリアのない社会に変えていきたい。」とお話があり、生徒達は大変貴重な言葉を胸に刻むことができた。</p> <p>○ドーピング講座  講師：安藤 裕一（スポーツドクター）  薬物使用の危険性を具体的に説明され、オリンピック競技中に生命を落した事例や、薬物は身体をつくるのではないということを丁寧に説明された。また、近年の日本のドーピングは「うっかり」で起きてしまうことが多いことも紹介され、全国大会に出場する選手が多いクラスであるために、大変参考になった。「スポーツの価値とは努力によってステップが上がっていく。ふけんこう（ふ：フェアでない、けん：健康を害す、こう：反社会的行動）であってはならない。」と話され、生徒達の今後の競技生活にも活かされる内容であった。</p> 
<p>6 主な成果</p>	<p>競技に対しての意識・関心・意欲の高い体育コースでの実施であったことから、事前学習の段階から大変興味を示していた。オリンピック競技の経験はあっても、車いすを使用したパラリンピック競技に取り組むのが初めての生徒ばかりであったが、体験を通して競技としての難しさや楽しさを知ることができた。</p> <p>ドーピングの講話では、禁止薬物のいろいろな事例や具体的な副作用等、かなり詳しく説明していただき、危険性について深く知ることができた。</p>
<p>7 実践において工夫した点  (事業の特色)</p>	<p>パラバドミントンのトップ選手との交流で、パラバドミントンの難しさや楽しさを知ることができた。</p> <p>短い時間ではあるが、全員が競技用車椅子に試乗することができ、なかなか体験することができない経験をする事ができた。</p>
<p>8 主な課題等</p>	<p>授業の一貫として実施していることもあり、運動好きな生徒達にとっては活動時間的な部分で、少し物足らなさを感じる面もある。全校行事としてしまうと活動スペースの問題もある。</p> <p>また、今回は山口県障害者スポーツ協会の協力で、10台の競技用車椅子を準備することができた。しかし、パラバドミントン用の車椅子ではなく、バラバスケットボール用の車椅子であるために、実際にプレーの際には、車椅子操作の安全面に十分に配慮しなければならない。</p>
<p>9 来年度以降の実施予定</p>	<p>元パラバドミントン日本代表選手を招き、インクルーシブスポーツの素晴らしさを体感した。同時にドーピングの危険性にも触れることができ、体育コースの生徒達にとっては興味深い話であった。来年度以降もこうしたパラスポーツを体験する中で共生社会の構築に向けた意識を高めるとともに、スポーツを「する、見る、支える、知る」人材育成に努めていきたい。</p>